
自死への誘い

平維茂

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

自死への誘い

【Zコード】

Z2454F

【作者名】

平維茂

【あらすじ】

派遣社員、杉本義男は生きる事に疲れ果て、死にたいと思つていたが、恐怖心も有り、なかなか実行出来ないでいた。しかし、昨年の暮れ大新聞の夕刊のコラムを見て心が決まった。それは、京都の著名な仏教学者の自殺に関しての論説であった。『仏教は自殺を禁じていない。自殺は【悪】ではない、勇氣有る決断である』勇気ある決断さえすれば楽になれるのだと杉本は思った。著名な仏教学者が言うのであるから確かである。杉本は直ぐに自殺する仲間を集め実効に移した。

寒さに肩を竦めながら朝の中杉通りを杉本義男はＪＲ阿佐ヶ谷駅に向かつて歩いた。歩道の両端の処々に一日前に降った雪が少しではあるがまだ積まれて残つている。今日は一月三十一日、いよいよ計画を実行する日であった。

昨年の暮れか

ら皆と何度も話し合い最終的に決めた事である。集合場所はＪＲ立川駅、午前九時。

予定では杉本を含め五人が集まる筈である。今日、参加しない者も居るかも知れない。それはそれで仕方がない。今回の事は誰にも強制は出来ない。それはそれで仕方がない。今回の事は誰にも強制は出来ない。強制する権利もない。ただ、希望する者達だけが集まり実行するのみである。

杉本は仕事の事でここ数年、深刻に悩んでいた。専門はコンピュータープログラ

マーである。会社組織に縛られる事を嫌い、最初から派遣社員の道を選んだ。しかし

し、現実は自分の考えた事とは全く違つていた。派遣社員は派遣先で正社員にこき

使われ、少しでも反抗すると直ぐに別の派遣先に変えられてしまう。更に、毎日が

残業の繰り返しで、自宅に帰るのはいつも夜中近くになる。僅かな睡眠を取り再び

出社する。休日も返上で体力的にも精神的にも極限状態にきていた。

同じ派遣社員仲

間も耐え切れず退職する者や鬱病で休職する者も大勢いる。鬱病で

休職した者の中

には自殺した者もいる。睡眠不足と肉体疲労が重なり集中力が低下し、無気力となり、それが原因で仕事上のミスも増え、逆に仕事量が増える悪循環に陥ってしまう

ている。仕事中に睡魔に襲われる事もしばしばであった。このまま永久に眠れたら

何と幸せかと思う事もある。出勤、帰宅時の電車でも何度も降りる駅を乗過ごした事

か。派遣会社には給与をペン撒ねされ、待遇改善を頼んでも一向に聞き入れて貰え

ず、それかと見て、今の自分には転職の当てもない。ましてや貯えなどは無いに

等しい。何を目的に働いているのか。これが人生なのか。このままで俺はどうなる

のか。杉本は肉体的にも精神的にも追い込まれていたが、自分は他の同僚と違い絶

対に鬱病にはならないと自信が有った。しかし、いつの日から自らも自死を考えるようになっていた。

ギリシャの哲学者プラトンは「肉体は魂の牢獄」と云っている。牢獄から抜け出せ

れば楽になる。楽になりた。何時間も、何日も、何年も眠り続けたい。死ねば必ず楽になれる。楽になれるなら早いに越した事はない。そう思えるようになつてい

た。

出勤途中、駅のホームで線路を見ていると、そのまま飛び込んで電車に跳ねられ

れば楽になるのではと思った事も何度か有った。しかし、結果を想像すると怖くて

出来なかつた。即死出来れば良いが、体が切断され痛みで苦しみながら死にたくは

なかつた。腕や足が切断されても死ねないかも知れない。体に障害を背負つて生き

て行かなければならなくなるかも知れない。それは絶対にいやだ。

杉本は自殺の方

法についても調べた。痛みも無く、苦しまず、楽に死ねる方法はないか。いつの間に

にか夢遊病者の様にインターネットで検索を始めていた。服毒、リストカット、首

吊り、入水、飛び込み、焼身、練炭自殺、その他諸々の方法が親切に掲載されてい

る。今の時代、自殺願望を持つた人間が多く居るのに驚かされた。それだけ人間に

とって、今は住み辛い世の中に成つてているのだと感じた。苦しんでいる人々が多すぎる。生活が苦しい。生きるのが辛い。生きる目的が無い。将来の希望が無い。人

間は何の為に生きているのか。ただただ、自殺願望を掲示板に書き込む事で今の気持を誰かに聞いてもらいたい、分かつてもらいたい、そうする事で

氣持が些かでも

樂になるのであらうか。ネット上にはそのような書き込みが無数に

ある。中には死

にたくても、いざとなると恐怖の余り死ねない人々も多い。決断が出来ないの

である。死への恐怖と生きる苦しみのジレンマに陥り、掲示板に自分の気持を書き

込む事で氣を紛らわせていると思われる者達も多くいるようである。

誰かに読んで

もらえば、それで気が休まるのである。自殺を思に止まるようにとのレスが有れ

ば、それで安心する。しかし、それに対し、「誰も自分の立場を分かつてくれな

い。自殺してやる」とまた反論のレスを書き込む。その繰り返しで

ある。実際に追

い込まれている者には何らの解決にはならない。しかし、自殺サイトの書き込みを

見ている内に不思議と自分も死ねるのではないかと思えるようになつてくる。死後の世

界がどうとか、死ねばどうなるかななどは考えない。とにかく楽になりたい一心であ

る。しかし実行には至らなかつた。なぜなら杉本にも死に対する恐怖感と自殺に對

する罪悪感も些かではあるが残つていた。そして殘念な事には全てのサイトに自殺

を実行して成功した者達の書き込みが無い事である。それが杉本に自殺を思い止ま

らせていた。しかし、昨年の暮れ杉本は新聞の記事を見て心が決まつた。それは、

京都の著名な仏教学者の自殺に関しての論説である。

『仏教は自殺を禁じていない。自殺は【惡】ではない、勇氣有る決

断である』

勇気ある決断さえすれば楽になれるのだと杉本は思った。著名な仏教学者が言つのであるから間違いない。仏様は自殺を勇氣ある決断として許しておられる。勇氣を持つて自殺さえすれば成仏出来る。あの世に行ける。そして、この世で肉体を持つた故の苦しみから開放され楽になれる。杉本は確信した。あとは実行する勇氣だけであった。杉本はその仏教学者に心の中で感謝した。

それからと言つもの、杉本は誰にも迷惑を掛けずに、痛みも無く、苦しむ事も無く、樂に死ねる方法がないかと必死で探し続けた。首吊りも意外と苦しみがないようにも言われているが、自ら首を吊つた後の状態を想像するとためらわれた。睡眠薬と酒を飲み、密室で練炭自殺をするのが一番楽に死ねるではと考えた。熟睡している間に苦しむ事も体の損傷もなく横になつたままの姿で安らかに死に至る事が出来る筈である。しかし、自宅で死ねば家主に迷惑を掛ける。車かと思つた。しかし、杉本は車を持っていなかつた。レンタカーを使えばレンタカー会社に迷惑が掛かり、

果ては親にまで迷惑が及ぶ。自ら命を絶つ事に於いて、出来る事なら誰にも迷惑を掛けた事はしたくなかった。しかし皆無とは言えない。魂が抜けた肉体は処理して

もらわなければならぬ。発見された後、場合によつては検死もさ
れるだろつ。事
後の処理に於いては申し訳ないが些かの迷惑が掛かるのは仕方がな
いかと思つた。

心が決まるとき杉本はインターネットの自殺サイトの掲示板の書き込みを以前より

真剣に見て回った。自殺をしたいが実行できないと悩む者、自殺を予告する者、自

殺の方法について書き込んでいる者。自殺する仲間を募集している者。なかには自

殺する意思がなく面白半分の冷やかしもいた。自殺を真剣に考える者に対して許せ

ない行為である。自殺防止の為のサイトも沢山有った。これから本気で死のうと考

えている者の気持や環境が一切分かっていない。道徳論、宗教論は何の役にも立た

ない。道徳や宗教で今の生活は楽にはならない。ましてや神、仏に祈つたところで

今の苦しい生活から解き放つてくれる訳が無い。

人間はいつか必ず死ぬ。フランスの哲学者パスカルが言つように入間は生まれながらに死刑を宣告されている。生まれた時から死刑囚である。そうであるなら、いつ

死ぬかは自分で決める。この命は誰の物でもない、俺自身のものである。他人にと

やかく言われる筋合いはない。全く迷惑な話であり、杉本は怒りを感じた。杉本は

掲示板の中で真剣に自殺仲間を求めていそうな者を見付けチャットやメールで何度も話しあつた。そして、その内の四人と最終的に会う事に決めた。

彼らと会つて本

気かどうか確かめ合い、本気なら決行日を決める事にする。

掲示板でのハンドルネームはMT、二十五歳、女性、車有り、職業は大手商社勤務。

不倫の末に相手の男に裏切られたのが自殺の理由であった。杉本はこの相手なら車が使えると思った。

「私、会社の上司と三年間不倫していたの。別の部のチームリーダーで妻子持ち。

これからも付き合つて行ければ結婚しなくても良いと思っていた。とても好きだつたわ。今、持つている車もその彼が買ってくれたの。私も誠心誠意、

彼に尽くした積もりでいたの。でも結局は裏切られた。もう死ぬんだもの全て話すわ。奥さんの事は別に気にはしていないわ。最初から妻子持ちと分かつていたし。

私、彼をとても愛していた。そして、信じていたわ。でも不倫の相手は私だけじゃなかつたのよ。

他にも付き合っている相手が居たの。それも私と同期の親友の子だつたのよ。そして、彼、その子には将来結婚の約束をしていたの。とてもショックだつた。彼女、

最初から彼を私と奥さんから奪い取る積りでいたのよ。それ以来、私、神経があかしくなつてしまつて。仕事も上の空でニースも多くなるしで、夜も寝られなくなつたわ。それでつい毎晩お酒や睡眠薬を沢山飲むようになつてしまつた

の。今はアル中

とオーバードラッグよ。酔つた勢いで彼が付き合つてている同期の子を殺そうかとも

思つてナイフを会社に持つて行つた事も有つたわ。でも結局、それは出来なかつた。

毎日が辛くてどうする事も出来ないの。何もかもに疲れたの。私、これから生きて

いても意味が無いわ。毎日、毎日死ぬ事ばかり考へているの。それで同じ死ぬなら

彼に仕返しをする事に決めたの。死ぬ前に全てを会社と奥さんにぶちまけて、彼を

恨みながら彼がくれた車の中で死ぬ事にしたの。車の名義は彼の名義のままだし。

今迄の彼との全ての経緯は手紙に書いて会社の役員全員と彼の奥さんには送るの。そ

れで何の未練も無いわ。生まれ変つてやり直したいの。痛みの無い楽な死に方？練

炭が一番じゃないかと思うよ。車？私の使つても良いわよ。一人で死ぬのは何とな

く寂しいような気がするの。知らない世界へ一人旅はしたくないしね。連れが居れば少しは安心出来る気がするの。四、五人のグループなら寂しくもないし、楽しい

と思うよ。あの世でも困つた時はお互ひ助け合へるんじゃない。結構良いかもね」「

杉本は話を聞いていて女の執念は恐ろしいと思つた。そして、はたら生まれ変われるのか疑問にも思つた。杉本自身は一度との世に生まれ変わったして人間死んだ

杉本は話を聞いていて女の執念は恐ろしいと思つた。そして、はた

くない、こんな辛い世の中は一度と御免だと思つていた。氣位の高い生意氣そうな女だと思ったが、彼女の車が使えるので何う反論はしなかつた。

四、

そして、K.T.、二十歳の男子大学生。

「死にたい理由？分かんないだ。でも、なんとなく死にたいんだ。大学に入つてか

ら死ぬ事ばかり考えているよ。親の言うように、幾つもの塾に通い、必死に受験勉強して親が希望する大学に入つたんだけど、それから毎日が何だか空しくて全然樂

しくないんだ。講義にも出席したくなくて無気力状態でさ。毎日アパートでゴロゴロしているよ。卒業して会社にも勤めたくない。それで、楽に死ねる方法が有れば

と思い探していたんだ。でも一人で死ぬのが何だか怖くてさ。仲間が居れば死ぬ事が出来るのではとも思つたんだ」

杉本は何だか彼の氣持が分かるような気がした。将来、学校を卒業し社会に出て会

社に振り回され、抑圧され、使い捨てにされ、結局は今の俺の様に身も心もボロボ

ロにされてしまうのだと同情した。社会に出てから追い詰められた状態で死ぬより

は、今死にたいと願つているのなら、それが彼にとつては良い選択ではと思えた。

自殺は罪ではないのだから。

N.M.、二十一歳の女性フリーター。

日雇い派遣の仕事でアパートの家賃も払えず、追い出されネットカフェを泊まり歩く生活にとことん疲れ果てたと言っていた。ここ数年の規制緩和で働く者の立場が

弱くなってしまった。派遣会社の乱立で企業は日先の利益に囚われ社員を大事にし

なくなり派遣で間に合わせようとする。社員を養成する事を怠り、労働者は使い捨

ての世の中になっている。働く側も派遣の立場では派遣先の会社を信用しないし、

忠誠心も湧いてこない。派遣先の会社も人を安く使おうとする。派遣社員の態度が悪いと判断すれば直ぐに派遣会社にクレームをし、派遣社員を入れ替えさせる。派

遣先企業の労働組合は派遣社員には冷たい。派遣社員に対する違法労働行為も見て

見ぬ振りである。正社員がやりたがらない仕事を押し付けられ、派遣社員には危険な作業も平気で押し付けてくる。労働組合も会社に抗議などする事もない。逆に派遣社員は労働組合や支持母体などから邪魔者扱いにされる。派遣社員が職場で怪我

をすれば労災申請をさせず組織全体で隠そうとする。派遣社員は一企業内には定着

しない、渡り鳥である。社内の情報が直ぐに外部に漏れる。熟練社員も居なくなる。

このような状態が続けば企業の信用も無くなり、企業としての体力も落ちてくる。

企業の命は有能な社員であり、その社員の育成である。更に正社員

と派遣社員の収

入の格差の広がりは著しい傾向にある。所得格差が広がり、外国なら既に革命が起きても不思議でない状態であるが、日本人は内に閉じ籠もり最後には自らの命を絶つ道を選んでしまう。人が大切にされない時代になってしまった。

これからも、この様な社会が続く限り近い将来日本の経済力も低下し、国際社会での競争力や信用も失われ、自殺者も更に増加するのは確実である、と杉本は思った。

最後にHW、十六歳の男子高校生。

原因は学校でのいじめであった。クラスの他の生徒の前で辱められる。校庭の隅に呼び出され暴力をふるわれる。金をせびられる。金を持って来なければ再び暴力をふるわれる。毎日学校に行くのが怖い。友達に会いたくない。親にも言えない。学校も教師も頼りにならない。何にもしてくれない。誰も自分を守ってくれない。全てが塞がれてしまっている。学校の屋上から飛び降りていじめた相手に思い知らせようかと考え自殺を試みたが怖くて出来なかつたと言つていた。でも、死にたい、楽に死ねる方法が有れば直ぐにでも死にたい、と言つていった。

今の時代、大人は子供を叱れない、子供を守れない。犯罪の低年齢化も進んでいる。

子供が親を殺す、親が子供を殺す事が平気に行はれる。教師の犯罪

も増えている。

学校、教師、家庭全てが狂っている。今の様な社会が続く限り、子供の自殺もこれ

から確実に増えて行く。成長し社会に出て毒され他人を傷付けるよりは、それ以前

に清い今まで自ら命を絶つのも良いか、と杉本は思った。

五、

一月の第一日曜、午後二時にJR吉祥寺駅の改札付近で皆と待ちわせをし、駅前

ビルの一階の喫茶店に入った。お互の氣持を確認し合つた為である。杉本を含め、

皆が皆、青白い顔色で強張つた表情をしていた。果たしてここに集まっている者は

皆が本気で自殺する氣持が有るのか、まだ疑いを持っていた。他の席の客に話の内

容を聞かれないよう出来るだけ小声で話した。

先ず、杉本から始めた。

「俺、YSの杉本義男」

続いてハンドルネームMTが自己紹介した。

「私はMTの武田美代子」

実名かどうかは定かでないが一応名乗った。杉本には彼女は気が強そうで自殺する

タイプには見えなかつたが、目の焦点が定まらない虚ろな表情をしていた。薬の飲みすぎではと感じた。

そして、KT、二十歳の男子大学生。

「俺、KTの寺池健作」

度の強い眼鏡を掛け、神経質そうな顔をしていた。

NM、二十一歳の女性フリーター

「私はNMの三澤直子」

薄汚れたジーパンを穿き化粧もせず、伏し目で、いかにも生活に疲れ果てた表情をしている。神経質そうに携帯電話の着信を絶えず気にしている。この期に及んでも派遣会社からの連絡を待っているのか。派遣会社からの連絡を待つのが習慣として骨

の髄まで染み付いている。着信が有れば一日生き延びる事が出来、無ければ途方に暮れる。その繰り返しである。その日暮しで将来の当ても無く日々齎える生活を

余儀なくされている。同年代の多くの女性達は化粧をして飾り立て楽しい生活を送っている。しかし、今の彼女は住む処にも困り、食べるにも事欠き、化粧品を買う

余裕などない。化粧をし、それなりの服装をすれば、魅力有る女性に成っているの

ではとも思ったが、今の彼女は精神的にも肉体的にも疲弊し切っている。杉本は目

の前に居る彼女に女としての美しさや魅力は微塵も感じなかつた。

HW、十六歳の男子高校生

「僕はHWの渡辺博光」

大人しく引っ込み思案の性格のようであった。椅子に座っていても、後ろを何度も

振り返つてみたりして、少しの音にも敏感に反応し、常に周りを気にして何かに脅

えている表情をしている。誰が彼をここまで追い込んでしまったのか。今の世の中、

全てに責任がある。学校、教師、いじめる側の生徒、その生徒を育てた親、いじめ

を見て見ない振りをしている回りの人間・・・。この様な社会が続く限り、これが

らも犠牲となる少年は後を絶たない、と杉本は思った。

「今日、集まつたのはお互いの気持を確認する事と実行日を決める為なんだけど」

杉本が皆の顔を見ながら小声で話した。

「そんな事、分かってるわよ。ところで貴方は大丈夫なの」

武田美代子がぶっきらぼうに杉本に訊いた。

「俺は勿論大丈夫だよ。君の車を使えるんだつたら」

「車は〇〇くよ。ワンボックスカーだから五人が乗っても余裕があるわよ」

血騒ぐかのようであつた。

「それなら良いよ。君の車が使えないと皆が困る事になるから。それで他の皆は」

そう言つて、杉本は他の三人の顔を見た。

「俺も良いよ。ずっと以前から気持ちは決まつてるよ」

寺池健作が言つと、

「私も良いわ。出来れば早く」

二澤直子は焦つているようであった。

「俺も」

最後の渡辺博光の声は小さかつた。

「皆、本当に良いのか。後悔しないのか？」

杉本が念を押して訊くと、皆が首を縦に振った。ここに来ている皆は悩みに悩み決めた事ではあると思ったが、その反面死ぬと言つ事がこんなに簡単に決められるものかと不思議に思えた。杉本は余りにも簡単過ぎて彼らが本気でいるのか、まだ半信半疑でいた。果たして決行日に皆が来るのか心配にもなつた。特に武田美代子の気が変わり来なくなると全てが狂つてしまつ。

「じゃあ、これで決まりだね」

杉本が確認するかのように皆の顔を見た。

「田口ちよこにするの。そして場所は、私、早い方が良いんだけど」

武田美代子は苛立つていた。

「私も早い方が良いは。もう生活費が底をついてしまっているし、これ以上今の生活に耐えられない。毎日、毎日携帯で仕事の連絡を待つてさあ、今

日は仕事に有り

付けるか、明日は仕事に有り付けるか、そんな心配ばかり。嫌な仕事でも生活の為には受けなければならないし。仕事が無い日が続くとカツブーム一杯で一日を過さなければならぬ事もあるわ。泊まる金が無くて、野宿した事も何度も有るの。

派遣先や派遣会社も私達の足元を見てくるしで、もう働きたくもない。労働基準法なんて別の国の話よね。もう何もかもに疲れたの。早く楽になりたいわ」

三澤直子は今にも泣きそうな顔をしていた。

働く者の立場が保護されていない。使い捨てである。杉本は今の派遣会社は国家公認の手配師だと思った。自殺者が増加するのは働く者の利益を蝕み、人権を蔑ろにする派遣会社と派遣社員を受け入れる企業、それらの制度を許した国にある。杉本は三澤直子を見ながら自分も同じ情況であると思つた。

「それじゃあ、一月三十一日は如何かな」

寺池健作が遠慮がちに小さな声で言つと、

「まだ、一週間以上有るじゃないの」

武田美代子が怒ったよつに大きな声で言つたので、店内にいる客が一斉に彼らに注目した。

「いめん」

そう言って、武田美代子が首を竦めた。

「困ったわ。実行すると決めたんだつたら、私も早い方が良いの」

三澤直子は困り果てた顔をした。

「俺も彼の言つようになつて三十一日で良いと思つんだ。理由は・・・

。飛ぶ鳥跡を

濁さずでさ、身辺整理の時間が必要なんだ。死んだ後に出来るだけ
身内や親戚、友

人に迷惑を掛けないようにしておきたいんだ。それと、もう一つは
気持の整理の時

間だよ。今は死ぬと決めていても途中で気持が変る者が出てくるかも知れないだろ。

『死ななければ良かつた』なんて言われると困るしな。あの世に行
つてから後悔させたくないからな」

杉本が落着いた様子で話した。杉本は死を前にして自分の気持ちが
握わっている事に
吾ながら驚いた。

「俺、気持は決まつているんだけど、やはり身の回りの物の処分
も有るし・・・」

寺池健作が皆に申し訳なさそうにしていた。

「僕、もう決めたんだから。一週間位だつたら我慢するよ。その間に遺書を書いたり、友人に手紙を書いたりするよ。皆と一緒に楽に死ねるんだもの気持ちは絶対変らないよ」

渡辺博光は自分を納得させるかの様であった。

「仕方ないはね」

武田美代子が渋々妥協した。

「私、これから一週間の間、どうすれば良いのよ。お金も無いし、行く所も無いのよ。」

早く楽になりたいのよ」

三澤直子はハンカチで涙を拭きながら、皆に懇願するかのようであつた。

「それじゃあ、あなた。それまで私の所に来れば・・・」

武田美代子は投げりの様な口ぶりであった。

「本当に良いの?」

「良いわよーこれも何かの縁よ」

「有難う。助かるは

三澤直子が嬉しそうな表情をした。

「それで、場所は何処にする?」

武田美代子が訊いた。

「東京と山梨の県境の山の中でどうかな。青梅街道から途中適当な山道を選んで奥に入つて行けば」

杉本が提案した。

「じゃあ、それで決まりだね」

武田美代子が言つと、他の三人が同時に頷いた。そして武田美代子が更に付け加えた。

「睡眠薬とお酒は私が用意するわね。沢山買つてあったので余つてるので。あの世には持つて行けないしね」

「七輪と練炭はどうする」

寺池健作が訊いた。

「七輪と練炭は、当日、途中のホームセンターで調達するよ

杉本がそう言って、皆の顔を見た。

「それじゃあ、私の住んでいる所、立川だから、当日は立川駅に午前九時でどう」「

武田美代子は畠でドライブにでも行くかの様に楽しそうであった。

皆から反論は出

なかつた。しかし、杉本は彼女の楽しそうな表情を見て、彼女が本

当に自殺を考え

ているのか不思議に思えた。それとも自殺する事で相手の男を貶める事が出来るの

で、それが楽しいのかとも思えた。しかし、これで取り敢えず決行の日は決まった。

決行の当日、杉本が阿佐ヶ谷駅に着いたのは午前八時に少し前であつた。都心に向かう中央線の電車は相変わらずラッシュでし詰めの状態であった。反対方向の高尾行きの快速はガラガラで座る事もできた。杉本はこれからはの様な過酷な状態で通勤しなくて済むのだと思つと両肩が急に軽くなつたように感じた。

「何故に人間は毎日、毎日あの様にまでして通勤し、会社では消耗品の様に扱われ、身も心もすり減らさなければならぬのかだろうか。人間、何の為にこの世に生きるのか、何の為の人生なのか。人間本来の生きる姿ではない、何とか世の中間違つてゐる。今、あのラッシュの電車の中で身動きも出来ない状態でいる彼らの中にも早く死んで楽になりたいと願つてゐる連中も沢山居るに違いない。彼らも今の俺たちと同様に早く『勇氣有る決断』をすれば楽になれるのに」と同情の念さえ覚えた。

車窓からは雲一つ無い、晴れ渡つた真冬の空と関東平野が一望できた。電車が荻窪駅を過ぎ、吉祥寺、三鷹と行くに従い、左手の遙か向うには雪化粧をした真っ白な富士山が見えた。とても綺麗だと思った。杉本は今までの人生で味わつた事が

ない、落ち着いた、そして清々しい気持になつた。立川駅に近くなるにつれて過酷な生活から開放され楽になれると確信した。今日のある瞬間からは悩む事もなくなり、苦しむ事もなくなる。この世に生きる煩わしさから開放されると思ひと楽しくさえなつてきた。そして、先日の武田美代子の楽しそうにしていた表情をふと思い出した。でもこの楽しさは彼女とは次元が全く違つとも思つた。

八

立川駅の改札付近には三澤直子が先に来て待っていた。武田美代子が駅の南側に車を止めて待つて居た事であった。九時少し過ぎて寺池健作も到着した。しかし、三十分過ぎても渡辺博光だけが姿を現さなかつた。耐え切れずに何処かで既に実行してしまつたのか。或いは気が変わり思い止まつたのか。もし、思い止まつたのであれば俺たちの事が漏れて誰かが止めに来るのはと急に不安になつた。そうで有れば急がなければならぬ。三人は周りを気にしながら武田美代子の車に乗り込み先を急いだ。国道十六号線に出て近くのホームセンターで七輪と練炭を買い揃えた。これで準備は万端であつた。車は福生市内に入り、右側にだだつ広い横田基地が見えてきた。横田基地を通り過ぎ、箱根ヶ崎西の交差点を左に曲がり青梅街道に出て車は西へ向かつた。

先日、最初に会つた時より皆の顔は穏やかな明るい表情になつていた。今日のある瞬間からこの世の煩わしさから開放されると確信しているのか、安堵感に包まれているようにも見えた。皆が、楽になれると言じているようであつた。

「あの高校生どうしたのかな」

後部座席に座っている寺池健作がポツリと言つと、

「怖くなつたのよ」

車を運転している武田美代子が当然であるかの様に言つた。

「来れば良かつたのにな」

寺池健作は仲間が減つたので残念そうにしていた。

「彼が自分で判断し自分で決める事だから、来なければ来ないで仕方がないよ」

杉本が皆に聞こえるよう言つと、

「それで良いのかな」

寺池健作は寂しそうな表情をした。

「でも、彼、今まで待てなくて既に何処かで実行したかも知れな
いわよ」

三澤直子が自分の境遇と照らさせ合わせた。

「そうかもね。きっとそうよ」

武田美代子は一人で納得していた。

「でも、一人で逝くなんて寂しいよな」

寺池健作はやはり仲間が減つた事への寂しさを感じていた。

「それはそれで仕方がないよ。彼の人生なんだから。他人がとやかく言えないよ」

杉本の気持ちであった。

「私さあ、昨日、会社の役員全員と彼の奥さんに手紙出したの。それも書留の速達で。全てぶちまけたは。今日着く筈よ。この車もまだあの人の名義だしね。大変な事になるとと思つよ。私、魂になつたら見届けに行くの。楽しみだはよ」

武田美代子は楽しそうにしていた。

「魂か・・・」

杉本は心中でふと思つた。はたして魂が有るのか、魂になつてこの世の苦痛から開放されるのか。どうであれ、今の生活から開放されるのは確かであるとthought。

車は既に奥多摩渓谷沿いの御岳駅近くまで来ていた。

「ねえ、最後の晚餐じゃないけど、最後の昼食をしない

武田美代子が楽しそうに提案した。

「それも良いね。でも私、もうお金ないよ」

三澤直子がうつむいてしまった。

「心配要らないは。私が皆に奢るわよ」

武田美代子がやつらつと、三澤直子は安心し笑顔になつた。

九、

平日で道路も空いていて観光客やハイカーの姿も無くゆつたりとした長閑な風景であつた。

四人は道路沿いの食堂に入り最後の食事をする事にした。平日とあつて食堂も開店休業の状態で客は杉本ら四人だけであつた。下の渓谷を流れる水音が良く聞こえた。

杉本は以前に数回、休日にこの渓谷に来た事が有つたが、平日には初めてであつた。

人が少なく、まるで以前に来た時とは全く違つた別の世界のようを感じられた。このような処でノンビリとした生活を毎日送る事が出来れば死ぬ必要は無いのにとも思えた。

「私が全部奢るから好きなもの頼んで。今日は豪華にいきましょうよ」

武田美代子が気前良く言ったので、各自好きな物を注文し、杉本と寺池健作はビールも注文した。

「いよいよだね」

三澤直子が楽しそうな表情をした。

杉本は三澤直子の様子を見て、今迄の彼女の生活がいかに過酷であったか垣間見る事

が出来た。

「やうね。あと少しね。皆、あの世に行つても宜しくね」

武田美代子は嬉しそうであった。

「これも何かの縁ね」

三澤直子は開放感に満ち溢れた表情をした。

「やはり・・・一人でなくて良かつたと思うよ。一人だと寂しい
もな。皆、宜しく」

寺池健作も安心していた。

「私、今まで貯めたお金、全部両親に送ったの。それに会社勤め始めた時に生命保険に入っていたの。受取人は両親にしてあるわ。掛けてから五年になるから自殺でも保険金が出る筈よ。先立つ娘としてのせめてもの償い。最後の親孝行ね」

武田美代子があっけらかんとした表情で言つた。娘の保険金が下り、大金を手にしたとしても親は悲しみこそすれ決して喜ぶ事はない筈である。杉本自身は両親には申し訳ない気持でいた。

「武田さんは何から今まで周到で偉いわね。私なんかとても真似できないは」

三澤直子は感心していた。

「そんな事ないわよ。結局は親不孝なんだよね」

武田美代子が自分を納得させるかのように、今迄とは違い少ししぜんみりとした表情をした。

「私なんか親に金銭的負担ばかり掛けで、親不孝ばかり。兄にも負担を掛けてきたわ。でも私が死ねば、これ以上家族に迷惑をかける事が無くなるから。それはそれでひと安心よ。

そら、親は一時的には悲しむかもしれないけど、結果的には親兄弟への負担もなくなるしね。これで良いんだわ」

今までの不孝を詫びるかのように三澤直子が話した。

「人間、いつかは必ず死ぬんだから。早いか遅いかの違いだよな。俺なんかこの世に生まれて来たのが最初からそもそも間違いだつたんだよな。小さい時から親の言い成りに何軒もの塾に通わされ、親の願う学校に進学して。子供の気持なんてお構いなし。子供は親の欲望、見栄を満足させる道具みたいなものだよ。親が満足しさえすればそれで良いんだよ。何の為の人生か分からないよな。人生なつてつまんないし、社会になんか出たくないよ」

寺池健作が自分を振り返りながら、親への不満をぶちまけた。

「今の世の中、狂ってるんだよ。狂ってる世の中とは早くオサラバした方が良いよ。もつすぐだから。もつすぐすると皆が一緒に樂になれるよ」

杉本もこの世の苦しみからもつ少しで解放されたと思った。

「もつね。もうすぐね」

武田美代子も神妙な顔つきをした。

「あの世でまた皆と会えるかな」

三澤直子が訊いた。

「皆、一緒に死ぬんだからあの世でも一緒にやないのか？」

寺池健作は当然の様に思っていた。

杉本は一人で死ぬか、皆と一緒に死ぬかはどうでも良かった。たまたま武田美代子が車を持っていたので仲間に加わっただけであり、皆の話を聞いていると返つて煩わしくなる事

もあつた。杉本は今までの人生の疲れが溜まっていたのかビールを飲んだせいで急に酔いが回つて来た。

「そろそろ行こうか

杉本が皆を促せた。

「皆、これから先の事はもう決まってるんだから。まだ慌てる事はないわよ。もう少し、この世の名残を味わつてこよう」

武田美代子が呟くと、

「わうね。それもわうよね」

これから先の生活に心配が無くなつた三澤直子が賛成した。

「どんどん食べてよ。私が奢るんだから」

武田美代子が皆に勧め、更に呟いた。

「私も飲もうかな。飲みたい気分なんだけどな」

「俺達飲んでしまつてるし、車は誰が運転するんだよ。酔つて事故でもしたら、予定が狂うよな」

杉本が心配して呟くと、

「武田さん。飲んで良いわよ。私、飲まないし、替わりに運転するから」

三澤直子が呟くと、

「あんた、運転免許持つてんだ」

武田美代子が驚いた。

「ええ、持つてるわ。以前、何度も車で配達の仕事もした事もあるし」

「そりなんだ。大変だね」

武田美代子がそう言って、生ビールを頼み一気に飲み干した。そして、その後は焼酎をチビリチビリとやり始めた。

「やはりお酒は良いわね。でも今日で飲むのも最後。今まで随分と飲んだわ。全てはあの男のせいよ。あの男が私を裏切ったのよ。死んでからも絶対恨んでやるから。恨み続けてやるわ」

杉本は思つた。武田美代子はその男に裏切られたかも知れないが、武田美代子もその男の奥さんを裏切つているのだと。勝手なものである。武田美代子は酒の所為で目が据わつた状態になつてきた。酒で顔が赤くなると言うより、青くなつてきた。それにしても女の恨みは恐ろしいと思った。死んでから本当に化けて出るのではと思った。今の様子から判断してその可能性は大いに有り得る。

「あんた達も飲みなさいよ。男なんでしょう。飲めるのは今日だけなんだから」

少し声が大きくなつてきたので杉本と他の一人が回りを気にした。

武田美代子は酔つた勢

いで今迄溜まつていた不満を杉本と寺池健作に一気にぶつけ始めたので一人はタジタジになってしまった。この調子で行けば、武田美代子に睡眠薬は必要なくなるのではと思つた。

「彼女、昨日まで毎晩飲み続けで凄かつたわよ」

三澤直子が小声で杉本と寺池健作に話した。

「それじゃあ君は毎日、彼女に付き合わされて大変だつたんだ」

杉本が同情した。

「そつでもないわ。お陰で彼女のアパートで今日迄ノンビリ過ぐせたから。彼女には感謝してゐるの」

「そろそろ、出た方が良いんじやないでしょつか

寺池健作が武田美代子の様子を見ながら心配していた。武田美代子は既に酩酊状態に近かつた。

「やつしょつか

杉本が武田美代子を促し、千鳥足の武田美代子を皆で抱えながら車に乗り込んだ。

四人は再び目的地を求めて走り始めた。武田美代子は後部座席でぐつすりと寝込んでしまっていた。

青梅街道を西に向かい適当な場所を探していたが結局見付ける事が出来ず、山梨の塩山まで来てしまった。塩山から国道一四〇号線を北に少し走ると山に入る細い道が左側に有つたのでそこに入る事にした。二、三十分ほど走つたであろうか、さらには細い林道を見つけた。林道には一日前に降つた雪が少しではあるがまだ積もつた状態で、タイヤの跡も足跡も無かつた。その林道を山の中に進んで行くと脇に車を行く台止める事が出来る場所を見付けた。

「いいで良いじゃないの」

そう言つて、三澤直子がその場所に車を止めた。杉本もさつき飲んだビールのせい

で車の助手席で眠り込んでしまっていた。

「起きてよ」

三澤直子が杉本を揺り起こすと、杉本は咄嗟の事で何が起きたか分からず、眠い眼を擦りながら周囲を見回した。

「なに寝ぼけてんの」

三澤直子が少し怒ったよつていつと、ひづていつと、

「ああ、じめん。すっかり寝てしまった」

杉本は素直に謝った。

「いいで良いでじょ」

三澤直子が再び杉本に訊いた。

「うん・・・」

杉本は「うん」までどの様にして来たのか分からず頬りなげに返事をした。

「それでは、始めましょうか」

寺池健作が促した。武田美代子は熟睡していて、起こしても起きる気配がなくそのまま寝かせておく事にした。三澤直子が睡眠薬の瓶を取り出し、中の錠剤をテッシュの上に広げた。

「飲みたい人は適当に飲んで。お酒は彼女が色々と用意してくれてあるから」

三澤直子が酒の詰まったクーラーボックスを開けた。クーラーボッ

クスの中には缶

ビールや酎ハイ、ウイスキーまで入っていた。杉本は車の外に出て七輪で練炭に火を熾し始めた。車の外は寒く凍えるようで、これから始まる儀式の事を思い緊張

も手伝つてか手元が思つように動かなかつた。慣れない手付きで火を熾すと、それ

でも暫くすると練炭の下が赤くなつてきた。準備は全て整つた。七輪は車の外に暫くの間置いたままにした。車の中に戻ると暖房が効いて暖かかった。

杉本はこの世

での最後の温もりかと思つた。それでも、眠り込んでいる武田美代子以外はさすが

に緊張してきた。杉本は急に胃が収縮するような激しい痛みを覚え、吐き気を催し

車外に飛び出した。寺池健作も氣分が悪くなつたようで杉本に続き車から出て來た。

三澤直子は緊張はしているが、落ち着いた様子で運転席から一人を中心配そうに見て

いた。いざとなれば、女性の方が度胸が据わるようであつた。

「大丈夫なの」

三澤直子が窓越しに声を掛けると、山道の脇にしゃがんでいる杉本と寺池健作が頭を縦に振つた。二人は暫く冷たい風に当たり、気持ちを落着かせてから車内に戻つた。杉本は自分の顔が引きつって来るのが分かつた。体が小刻みに震えていた。寺池健作も同じであった。そして、皆無口になつていた。

「大丈夫ね。これで良いのよね」

三澤直子が自分を納得させるかの様に杉本と寺池健作に念を押した。

「そうだよな。これで皆が楽になれるんだ」

寺池健作も自分自身を納得させた。杉本は寺池健作の声が震えているように感じた。

杉本にも今迄感じた事がない恐怖感が急に襲ってきた。三澤直子が大量の睡眠薬の

錠剤を口に含み、酎ハイで一気に飲み、そしてシートの背凭れに凭れ掛け眼を閉じ

て静かに待つた。杉本と寺池健作はそれを見て震える手で缶ビールの蓋を開け、睡

眠薬の錠剤とともに飲んだ。杉本は恐怖と緊張による胃の痛みで戻しそうになった

が我慢した。暫くは緊張のせいか中々眠気を催してこなかつた。それでも薬とアル

コールの相乗作用により急に睡魔が襲つてきた。

「それじゃ、始めるよ」

杉本がそう言つて助手席のドアを開け七輪を車内に入れた。事の成り行きを知ら

ずに既に眠っている武田美代子を除いた三人はシートに深く座りこの世の嫌な事が

ら開放されると信じて眠りの世界に入るのを待つた。

「ああ、これで毎日あくせく働く必要も無くなる。ゆっくりと眠れ

る。この世の疲

れから開放される。もつ直ぐ、もう直ぐで楽になれる

杉本は心中で自分にそう言い聞かせた。強烈な睡魔が襲いかかり、一瞬金縛りに

会ったかのように体が動かなくなり、意識が朦朧とした。やがて深い永遠の眠りの

世界に陥いるかのように思われた。こんなに気持ち良く眠れるのは何年ぶりである

うか。長年、体に蓄積されていた疲労感や苦痛が消え去つて行くようであった。とても気持が良かつた。

「これで良いんだ。やはりこれで良かった。やっと楽になれる」

杉本は眠りの中で思った。そしてその瞬間、幽かに夢を見たような気がした。

何時間経つたであろうか、杉本は頭の芯を締め付けられる激しい痛と呼吸困難で

眼を覚ました。そして自分が車の外で地面に這い蹲り苦しさでもがいているのに気が付いた。周りは既に田が暮れ真っ暗闇になっていた。

「いつの間に車から出たのだろうか。苦しきの余り無意識に飛び出したのだろうか。

頭が割れそうに痛い。息が苦しい。自分は死ねなかつたのか。何でなんだ。他の三人は？」

苦しみの中で杉本はそう思つた。ふと、周りを見ると暗闇の中で他の三人も地面に這い蹲り苦しみで必死にもがいているのが幽かに見えた。

「なんだ、奴らも死ねなかつたのか」

杉本は余りの苦しさで彼らに声を掛ける事が出来なかつた。それに強い吐き気と喉の渇きを覚え、それと共に今まで味わつた事のない恐ろしい程の孤独感が体全体を襲つてきた。

「これは何なんだ。楽に死ねる筈だったのに

杉本は失敗したと思った。そして、必死の思いで立ち上がり、四、五メートル先の

車に戻ろうとした。ふらふらになりながら一歩一歩車に近付いて行き、助手席の窓

から中を覗き込んだ。その瞬間、啞然として立ち竦んでしまった。

助手席には苦し

みに喘ぐ顔をした自分が横たわっていた。運転席には三澤直子、後

部座席には武田

美代子と寺池健作の姿が有つた。彼らも苦しみで顔が歪んでいた。

「これは、これは……、一体どうしたんだ」

杉本は情況が直ぐには飲み込めなかつた。その間にも頭は割れるような激痛に襲わ

れ、呼吸困難と吐き気がした。それと寒氣と、えも言われぬ寂しさを感じ体全体に

震えがきて、鎧でも着たかの様に重く感じた。杉本は車の中に入ろうとして扉のノ

ブに手を掛けると手が扉を抜けて車の中まで入つてしまつた。

「あー。俺は、俺は……」

杉本は啞然とした。

「車の中に横たわっているのは……？」

後ろを見ると、他の三人が這いながら車に近付いて来るのが見えた。そして杉本に

は彼らの姿が近くなるに従い白く透き通つて見えた。彼らも杉本と同様に苦しみで

喘いでいた。

「助けて・・・。苦しい。我慢出来ない。早く、早く救急車を呼んで。こんなに苦しいんだつたらもう死にたくなんかない」

それは武田美代子の声であった。

「苦しい、苦しい。お願い、助けて」

三澤直子が絞るような声で泣き叫んでいるのが聞こえた。寺池健作も苦しみで喘ぎながら何か叫んでいたが声にならなかつた。杉本は苦しみと恐怖のあまりその場にしゃがみ込んでしまつた。暫くして武田美代子がよろけながら杉本の傍に来て言つた。

「お願い。車の中に携帯が有るわ。それで救急車を呼んで。早く、早くして」

髪を振り乱し顔は苦痛で歪み半狂乱の状態になつていた。情況が飲み込めず、杉本を見ても生きた人間にしか見えないようであつた。

「俺たち、俺たち死んだんだよ」

杉本が絞るような声で武田美代子に言つと、

「そんな筈ないは。こんなに苦しいんだから。お願い。早く救急車を呼んで。我慢できないの。頭の芯が締め付けられるように痛くて、息も苦しいの。」

早くお願ひ。
お願ひよ」

武田美代子は泣き叫びながら杉本に懇願した。杉本自身、苦しくて他人の事まで構つていられなかつた。

「車の中をよく見るんだ」

今の杉本にはそれを言つのがやつとであった。武田美代子はようけるようにして立ち上がり車の中を覗き込んだ。

「ギャーーー！」

武田美代子が叫んだ。

「私たち・・・」

武田美代子はそう言つたきり地面に倒れ込んでしまつた。そして、何度も叫び続けた。

「どうしたの。何なの。何なのよ」

「頭が割れそうに痛い。息が出来ない。苦しい、助けて・・・」

「お願いだから助けて・・・」

「助けて、助けて、ねえ、助けて・・・」

「神様、助けて下さい」

「仏様、助けて下さー」

「神様、仏様・・・。お願ひ！」

何度も、何度も、何度も泣き叫び続けていた。寺池健作も三澤直子も杉本の傍に来て、車の中を覗いた。その後の事は武田美代子のそれと同じであった。彼らも苦痛のあまり叫び続けた。杉本も同じであった。

「何で、どうして」

「楽になれる筈じやなかたのか」

「頭が痛い。息が出来ない。苦しい」

杉本も叫んでいた。そして、極度の孤独感と恐怖感に苛まれた。彼らにとつて、昼も夜も薄暗い闇の世界となってしまった。杉本は山の中だからかと思つた。お互いの顔は青白く苦しみで端え、痩せこけた表情に変つた。生前とは似ても似つかない、

見るも無残な姿となり、正しく「者そのものになっていた。

一週間経つたであらうか、通りすがりのハイカーが車を見つけ警察に通報した。

間もなく警察のパトカーや捜査の車が何台も来て現場検証が始まり、死体が検死の

為に病院に運ばれた。死体が運ばれると同時に何かの糸で引っ張られるかのように、

杉本と他の三人は自分達の意思とは全く関係なく死体に付いて行つた。そして検死

台で監察医が自分達の体を順番に切り刻む情況を見せられた。メスで喉、胸、腹を

切開され、更に内臓まで取り出され調べられた。女性の場合は子宮と膣まで開けられ

れて調べられた。武田美代子の子宮には子供の握り拳程の小さな胎児がいた。武田

美代子はそれを見るなり氣が狂つたように叫んだ。しかし、その叫びは生きている

人間には届かなかつた。皆が皆、自分の体が解剖されるのを見て惨いと思った。顔

を背けたくても何かの強い力が働き顔を背ける事が出来ず、目も閉じる事が出来ない

かつた。最初から最後までこの光景を見続けさせられた。検死の結果、一酸化炭素中毒による集団自殺と断定され、遺体は身元が判明した順に家族に引き渡された。

家族が遺体を引取ると同時に、本人達も遺体に引き寄せられて付いていった。それ

から、皆とは永遠に会う事はなかつた。杉本は自分の亡骸の傍で頭

の痛みと呼吸の

苦しさに喘ぎ、孤独感と恐怖感に苛まれ続けた。これから一休全体どうなるのか不安

安が増した。死んでも楽になれず、生きている時以上に苦しみが増幅した。肉体から離れたにもかかわらず肉体の重さを感じ、より以上に肉体的苦痛も感じた。どう

すればこの苦しみから逃れる事が出来るのか。もはや生前の様に自殺と言う逃げ道は無い。葬式が済めば楽になるのか。僧侶が読経を上げ成仏させてくれるのか。

杉本は期待した。棺に入れられた自分の亡骸を苦痛と共に見続けていた。両親や親戚が集まり何か話しているようではあったが、生きている時と違つて良く聞き取れなかつた。只、悲しんでいる事だけは分かつた。通夜が済み告別式も終り亡骸は斎場に運ばれた。斎場で台車に乗せられ釜の中に入れられ点火された。釜の扉の外に立

ついていても、自分の亡骸が焼かれるのが良く見えた。火で焙られスルメの様に返り、粉々になり、灰となつて行く。抜け殻と成つても、生きたまま焼かれている。よう熱さを感じた。

通夜や告別式の間、僧侶が経を上げていたが、それを聞いても意味が判らず、ましてや一向に樂に成らなかつた。助けを求め僧侶に縋り付こうとしたが杉本の体は僧侶をすり抜けてしまった。

「何だ！」の坊主は、坊主の仕事は仏を供養する事じゃないのか。

魂を成仏させる

のが坊主だろうが。俺は、俺は、何も悪い事はしていない。偉い仏

「ここ勇氣有る決断をしたんだ。早く成仏させてくれ。樂にしてくれ。」

お願いだから。

頼むから。何だこの糞坊主

杉本は何度も叫び続けた。しかし、僧侶は何も感じないのか、読経が終わると、参列者に向かって一言言つた。

「『子息は魂となつてあの世に戻り、仏弟子となられました。これからは御仏の下で修行に励まれます』

そして、お布施を受け取りそそくひと帰つてしまつた。

あの世が有るのか。あの世から誰も迎えに来てくれない。どの様に行けば良いのか
も分からぬ。頭が割れる様に痛い。息が苦しい。孤独感と寂しさに苛まれ続け

ていた。杉本はこんな筈ではなかつたと後悔した。楽な死の方を選んだ筈であつた。

そして、死ねば楽になれると思っていた。しかし、生きている時より、肉体の無い

き泣きながら必死に助けを求めたが気が付く事はなかつた。更に、

ご本尊とご先祖

に助けを求めるよつと仏壇の前に行いついたが、何らかの力が働いているようで近

付く事も出来なかつた。今、武田美代子、寺池健作、三澤直子も俺と同じ苦しみを

何処かで味わつてゐるのか。こんな筈じやなかつた。杉本は後悔の念で一杯になつた。

た。

「仏教は自殺を禁じていない。自殺は悪ではない。勇氣ある決断である」、筈であ

つた。それなのになぜなんだ、杉本は思つた。絶望感で一杯になつた。

「あ・・・、助けてくれ、助けてくれ。お願ひだから俺を助けてくれ

杉本は叫び続けた。

杉本の両親は最愛の息子を自殺で亡くした悲しみで憔悴し、実家は重苦しい雰囲

気に包まれていた。両親は杉本の幼い頃からのアルバムを取り出して、何度も何度も見ては涙を流した。生まれた頃の写真、小学校の時の写真、中学校、高校、大学、社会人と順番に見ながら、当時の事を思い出し、話しては再び涙した。

「お父さん。これあの子が一才の時のお誕生日の写真よ」

「そうだね。まだ三ヶ月歩きで。可愛い盛りだったよな。俺もまだ若かったしな」

「お父さん。見て、見て。これは中学校の遠足の時の写真ですよ」

「反抗期で生意気盛りだったよな。一キビが出始めた頃だよ」

「そうね・・・ええと、これは社会人に成り立ての頃ね」

「就職が決まり、義男も自立出来るようになつて、これでやっと親の責任が果たせたと思ったんだよな」

「あの子、近い将来結婚して孫の顔を見せてくれるかと楽しみにしていた
のにねえ・・・」

そして再び涙するのであった。

「義男には余程辛い事が有つたんだろうな」

父は眼を真っ赤にしていた。

「何が有つたのでしょうか。お父さん。私達に相談してくれても良かったのに」

「社会に出て生きていく事は確かに大変な事だけど、私達夫婦も今まで生き抜いてきたんだから義男にも生きていて貰いたかった。私達夫婦は結婚し子供を育てながら今までなんとかやってきた。辛い事、苦しい事も有つた。母さん、そうだろ。人間生きていれば死にたいと思う事は何度も有るよな。でも辛い事、苦しい事ばかり

じゃないよ。生きていれば必ず良い事もある。義男はまだ若い。これから先、生き

ていれば楽しい事も有つた筈だよ。人生諦めるのが早すぎたよ。残念でならないね」

「お父さん。私達の育て方が悪かつたのでしょうかね。甘やかせて柔な子に育ててしまつたのでしょうか。もっと社会の荒波に耐えられる子に育てるべきだつたのでしょうか」

「それはどうかな。元々、義男は内に籠もる性格だったから、自分

で考え込んで外

に発散する事が出来なかつたのかも知れないな。私達に相談が出来なければ、誰か友達にでも相談していくれば違つた結果になつていたかも知れないな。私達夫婦は何の為に今まで頑張つてきたのかね

「そうねえ・・・」

子を失くした親の悲痛な叫びであつた。

「母さん。でも今の世の中、昔と違つて生きるのが難しい時代なのは確かかも知れないね。若者に限らず全ての世代にとって。確実に自殺が増えている。今まで社会を支えてきた五十代、六十代の人達の自殺も増えているらしいよ」

「最近はJRや地下鉄もよく飛び込みが有つて遅れる事が度々です
よね。ニュースで聞くたびに今日もまた、今日もまたと思ひますよ。出勤時間帯に多いみたいですね。会社に行きたくない理由があるのでしょけれど、そこまでしなくてもとは思つのですが。私達、家庭の主婦には分からぬ何かが有るのでしきうけどねえ」

「そうだな、昔と違つてあまりにも世の中進歩が早すぎると。そのスピードに人間が付いて行けない環境になつてゐるのは確かだよ。あまりに技術開発、商品開発が早

く、それに携わる人間は昼夜を問わず働かさせられる。それでないと企業として生き残れないシステムになってしまっているからな。人間の生活サイクル以上に世の中の進歩のサイクルが早くなり過ぎているんだな。人間の生活を豊かで樂にするのが技術進歩だつたはずだが、逆にその進歩が人間社会を狂わせてしまっている。義男もその犠牲者の一人かも知れないな。でも矢張り自殺は良くないよ。母さん」

「そうですよ。世の中、辛くても苦しくても頑張って生きている人達が大勢いるんですから。残された者の悲しみは並大抵のものではないですからね」母が先立つた息子を思い再び涙した。

「今の社会全体が人に対する優しさが無くなつて来ているようだね。昔は貧しくても人間関係は大らかで余裕のようなもののが有つたよな。近所付き合いや子供同士にしてもそうだ。今は全てにおいて刺刺してきているし、人間が使い捨てにされる世の中だよ。他人がどうなるつとお構いなし、自分達の事だけしか考えなくなつてしまつてしまつて」

「社会が進歩する事で何処かが狂つてしまつたんですね。親が子を殺す、子が親を殺す事件も増えてますから。嘆かわしい事です。私達からすると考

えられませんね」

「でも、でも・・・、義男には生きてもりいたかった。何が有るつ
と生き続けてい
てもりいたかつた。義男、義男、義男・・・」

父は息子の事を思い嗚咽してしまつた。

杉本はいかに両親が息子を愛してくれていたか今になつて分かつた。毎日傍で両親の悲しむそんな姿を見るのが辛かつた。

「親父、お袋。俺が悪かつた。間違つていた。許してくれ。許してくれ」

杉本は悲しむ両親に向かつて詫びたが、届く術もない。でも今は俺の死を悲しむより、この苦しい状態から早く助け出して欲しかつたが、両親にはどうする事も出来なかつた。すぐ傍に息子が居て助けを求めている事すら分からぬのである。幾ら、

杉本が傍で意思表示をしても気付く事はなかつた。肩が凝るか、体が重いくらいにしか感じていないうつであつた。

「義男の魂はまだ私達の傍に居るのでしかね。そうだとしたら、何か言つて欲しいですね」

母親がやつとつと、杉本が叫んだ。

「やうだよ、母さん。俺は母さん、父さんの傍に居るよ。苦しみでいだから助けてよ」

しかし、母親の耳には届かなかった。

「でも私達の悲しみをよそに今頃義男の魂は仏様とご先祖様に導かれて成仏しあの世で気楽に過ぎ」としているかもしれないな。母さん」

「父さん。そんなんじゃないよ。成仏なんかしてないよ。成仏させてくれよ。仏様」といふ先祖様にお願いしてくれよ。頼むよ」

杉本は必死に叫んだ。

「やう思いたいですね。でも昔から自殺した人は中々成仏出来ないと聞いてますけど。あの世に入れてもられないとか」

「やうなんだよ。母さん。助けてくれよ」

杉本は悲痛な思いで再び叫んだ。

「色々言う人もいるだらうけど、あの世に行つて確かめた訳でもないからな。私達の眼の黒い内は盛大供養を続ければ良いよ。義男もきっと成仏して喜んでくれるよ」

「やうですね。お父さん。仏壇で毎日ご先祖様にお願いしますね」

「私も毎日仏壇の前で手を合わせてお願いするといふ

杉本の叫びは両親に届く事はなかつた。

一年も経つたであろうか、心労からか父親が心臓発作で急に亡くなつた。臨終と同時に、父親の魂は体から離れ穏やかな表情で暫くの間母親の傍に付いていた。四十九日が過ぎた頃にはあの世から迎えが来て父親の魂は旅立つて行つた。

「父さん。父さんも死んだのだから俺が見えるだろう。俺を助けてくれよ。今の苦しみから救い出してくれよ。そして一緒にあの世に連れて行ってくれよ。父さん。父さんたら」

父親が亡くなつた日から魂があの世に旅立つ日まで杉本は父親の魂に何度も話し掛け助けを求めた。しかし、父親は杉本が助けを求めても一向に気が付かないでいた。

杉本には父親の魂が見えても父親には杉本が見えていなかつた。頭が絶えず割れるようになつた。激痛で苦しむ。辛い。早くこの状態から助け出して欲しい。

しかし、誰も手を差し伸べてはくれない。このままの状態が未来永劫続くのかと思うと、いたたまれなくなつた。悲しかつた。毎日を激痛に耐え、苦しみに耐え、孤独感にさいなまれ、肉体を持つた時以上に重くなつた魂を引きずりこの世を

さ迷い続けるのであつた。この苦しみから逃れるには、神仏の力に縋るしかないと

思つた。杉本はまず実家近くに在る寺に向かつた。重い魂を引きずり苦しみに喘ぎ

ながら歩いた。やつとの思いで山門の前までたどり着き、山門を潜ろうとしたが、

それ以上進む事が出来ない。寺の境内に入る事が出来ないのである。何らかの見え

ない強い力により拒まれてゐるかのようであつた。杉本は諦めずに別の寺を目指し

た。次の寺、また次の寺。どれだけ多くの寺を回つたであろうか。結果は最初の寺

と同じであつた。山門から境内には入る事が出来なかつた。入る事が許されなかつたのである。自ら命を絶つた者への仏の世界の仕打ちかと思つた。

「仏は慈悲の世界。助けを求めるべ、誰彼となく分け隔てなく助けの手を差し伸べてくれるのではなかつたのか」

杉本は山門の前で呆然として立ち竦んだ。それでも杉本は山門の外から見えない本堂の中の仏に向かつて助けを求める祈り続けた。しかし、何ら応えは還つてこなかつた。寺の山門の前には杉本と同様に仏の慈悲に縋り助けを求める集まる自ら命を絶つた者達の惨めな姿を見た。山門の前に立ち竦む者、土下座をしている者、這い蹲つ

ている者、様々であつた。しかし、仏は沈黙し、彼らには何ら手を差し伸べる事は

無かつた。仕方なくその場を痛々しく立ち去り次の寺を目指す者。

疲れ果て山門の

前に座り込む者。ただ聞こえるのは彼らの呻きにも似た声だけであった。

「本当に仏は居るのか、仏と言つ存在が有るのか」

杉本は疑問に思つた。

「誠に仏が居るのなら、何故俺を助けてくれない。何故成仏させてくれない。仏は慈悲なのか。寺の僧侶や学者の言つ事は嘘なのか。出鱈目を説いているのか」

杉本は見えない仏に対して叫んだ。

杉本は再び重い魂を引きずり歩き始めた。仏が駄目なら神が有る。
そう思い神社を探しながら歩いた。神社の近くまで行き鳥居が見えたかと思つと
その瞬間眩しい光が放たれ眼が眩み、それ以上近付く事が出来なかつた。他の神社
にも行つたが同じであつた。神社に近くなるに連れて杉本の体の無い魂は益々重く
なり苦しさが増幅した。キリスト教の教会にも行つたが、結果は神社と同じであつた。近寄る事すら出来ない。これも仏の世界と同じく神の世界からの仕打ちかと思つた。寺でも、神社でも、教会でも、田に見えぬ壁が立ちはだかり全てが拒まれた。自ら命を絶つた者は神、仏の世界から見捨てられ完全に拒絶されていると感じた。さ迷い歩くに従い自分と同じ境遇の者達とも出くわし、数が多いのに驚かされた。

彼らの姿も自分と同じく悲惨であつた。青白く透き通り、顔はこけ亡者の姿と化し、叶わぬ助けを求めながらさ迷い続けていた。

決まつて彼らの集まる処は廃屋か薄汚い暗い場所であつた。杉本も年月が経るに従い彼らと同じくその様な場所で過ごすようになつていた。首吊り自殺をした者、焼身自殺をした者、ビルの屋上から飛び降り自殺をした者、列車に飛

び込んだ者、入

水した者、様々であった。彼らはその時の姿、痛み、苦しみを引き
ずりながら迷

つていた。足や腕が切断された者、頭が割れた者、顔が削げた者、
全身が焼け爛れ

た者、首が絞まつたままの者。激痛に耐えかね絶えず悲鳴を上げ苦
しみもがいて過

ごしていた。正に地獄絵を見ているようであった。杉本は彼らの中
に高校生の渡辺

博光の姿を見たような気がした。首を吊つたようで、首には太いロ
ープが巻きつい

ていた。首が伸び、舌が口からはみ出し、口ダレが絶えず滴り落ち
苦しみに喘いで

いた。彼らの中には心中した者達もいた。心中した者達はその瞬間
から未来永劫離
され一度と会う事は叶わなかつた。

自ら命を絶つた者達は同じ廃屋に居てもお互に会話を交わす事はなかつた。眼を合わす事すらない。同じ境遇の者として、同じ場所に居るだけの事であつた。働く必要もなく、食べる必要もない。しかし、喉は渴き、激痛に呻き、苦しみにさいなまれ、神、仏から見放された魂は行く当ても無くただただ迷い、たむろするだけであつた。幽靈屋敷と呼ばれ、肝試しに来る連中もいた。また心靈現象と称して靈能者と取材に来る放送局も有つた。廃屋が壊され更地になり、新たに建物が建つ事になると更なる廃屋を求めて放浪するのである。今居る世界は地獄でもない。地獄ならば神や仏の救いも有る筈。しかし、今居る世界は全てから見放された世界であつた。自ら命を絶つ事が罪であるなら、その罪を犯した者達の牢獄の世界である。

今、味わっている痛み、苦しみなどは人間として生きていた時とは比べ物にならない位に過酷で残忍である。生きている時の苦しみは一時的なもの。我慢も出来るであろう。時が経てばその苦しみも無くなるであろう。自らも努力すれば苦しみから抜け出す事も可能であろう。生きていれば時が全てを解決してくれる。親、兄弟、

親戚、友人の助けを借りる事も出来るかも知れない。たとえ辛く苦

しい人生でも、

時が来れば必ず魂は体から離れ元の世界に戻れる。寿命を全うした魂は元の世界か

ら受け入れてももらえる。そこには今の様な過酷で苦しい世界は無い筈である。し

かし、今居る世界は誰も助けてくれない。助かりたい、助けてもらいた。神の姿も

仏の姿も見えない。見えるのは同じ境遇の「迷つ」者達だけである。気が狂えば樂

になるであろうが、それさえも許されない。死ぬ事も生きる事も出来ない世界。絶

えず拷問を受けているかのような状態である。自ら命を絶つた者達への神、仏から仕打ち、戒めか・・・。

人間の世界でも中には亡者の姿が見える者達も居た。助けを求めて縋つて行くと、

強い力で跳ね返された。生きている身内が彼らに供養を頼み救われる亡者も中にはいたが、それは稀であった。

十八、

何年経つたであろうか。杉本は実家に行つてみた。母も既に亡くなっていた。代が替わり弟夫婦が住んでいた。両親の遺影とその横には杉本の遺影も有つた。幽かに弟夫婦の会話が聞こえた。

「義次さん。お母様、今年は三回忌よね。お父様はいつ亡くなられたのでした?」

「そうだな。親父が死んで七年になるかな。仏壇に過去帳があるから調べてみるよ」

弟の嫁が仏壇から過去帳を取り出してきた。

「お父様が亡くなられて七年だはね。やはり三回忌よ。お父さんの七回忌とお母さんの三回忌を一緒にお寺さんにして頂きましょ」

「輝美。それが良いな」

「あれえ。お兄さん、去年が七回忌だったんだわ。いけない、すっかり忘れていた」

「兄貴が・・・。もうそんなになるのか」

「お兄さん、確か自殺されたとか」

「うん。そつなんだよな。兄貴は馬鹿だよ。親不孝もいじりだよ。

結局両親の寿

命を縮めたのは兄貴だよな。罪な事するよ」

「お父さんやお母さんは、お兄さんが自殺されたのが余程辛かつたのでしようね」

「毎日、毎日悲しんでばかりいたよ。親父なんか憔悴しきってさ、傍で見ていて可哀相だったよ。手塙に掛けた子供に先立たれたのだからな。親父は俺なんかより兄貴に期待していたもんなあ。母親も辛かつたんだろうけど、親父の悲しみ方があまりにもひどかつたもので、母親はそれを見てぐっと耐えていたんだと思うよ。母親が確りしなければと思つたんだろうな。気丈に振舞つっていたよな。いざとなると女の方が強いかもな。男は精神的に脆いからな」

「そうね。女には子供を生む力があるからね。母性本能と言つのか、男性よりは逆境に強いかもね」

そう言つて弟の嫁が笑つていた。

「俺は自分の子供が先に死ぬなんて考えられないよ。もしさうなつたら気が狂うか
もしれないな。親父の気持が良く分かるよ」

「もしも、もしもよ、そんな事になつたら私だつてどうなるか分か

らないわよ

「やうだよな。でもお袋は本当、氣丈だつたよな」

「お父様の手前、随分と我慢されていたのでしきうね。子供は夫婦の宝だし。それに、私達夫婦にはそんな事絶対にないわよ。上の子も、今お腹の中に居る子も大丈夫よ」

「子供が居てこそ親はいくら辛くても、苦しくても頑張る事が出来るんだよな。それに子供が順調に育つてくれる事が親の最大の喜びなんだよな」

「そうね。親は有り難いはね。子供の為には犠牲になれるんだもの。子供を守る為には死んでも良いと思つもね」

「俺も子を持つ親となつて初めて親の有り難味が分かつたよ

「私もそうよ」

「そうだ、そうだ。俺たちの子供は絶対に大丈夫だ。俺が絶対に守つてみせるよ」

「私も精一杯頑張るわよ」

弟夫婦はとても幸せそつだつた。

弟の代になり、更に弟の子供の代になるにつれて自分の存在も忘れ

去られてしまつ
のであるうつと思つと尙更切なく、悲しくなり、居たたまれない氣持
になつた。忘れ
去られる前に助けてもらいたい。肉体から離れても苦痛に苛まれ続
けているこの魂
を早く救つてもらいたい。そして行くべき世界に送り届けて貰いた
い。杉本は願い続けた。

神、仏に見放され、身内にも忘れさられようとしている。杉本は重い魂を引き摺りながら廃屋に戻つて行つた。その道すがら思い続けた。

「俺は愚かな事をしてしまつた。もう取り返しがつかない。たとえ辛くとも、苦し
くとも、人間として生きるべきだつた。寿命を全うすべきだつた。
人間の寿命なん
てたいした長さではない。精々六十年、長く生きたとしても七十年
か八十年である。

たとえ百年生きたとしてもたいした長さではない。苦しい時、辛い
時はその人生に
於ける一瞬の出来事である。決して長くは続かない。生きていれば
楽しい事も必ず
有る。生きていれば全ては時が解決してくれる。人間の気持は決し
て長くは続かな
い。絶えず変化する。苦しい事も辛い事も時が経てば忘れてしまつ。
忘れさせてく
れる。そのように人間は作られている。それ故、新たな喜びを求めて
行動する事も
出来る。生きていれば山も有り谷も有る。喜びも有れば苦しみも有
る。それが人生
である。一時の苦しみに打ちひしがれ愚かな行動に走つた故、未來
永劫、苦痛から
抜け出せない世界に陥つてしまつ。今の俺がそつだ。この世界では

時間が止まつて
しまつている。痛み、苦しみ、辛さ、孤独・・・・これらから決し

て解き放たれる

事がない。永久に付き纏う苦しみである。時間が解決してくれない世界。許される

ものなら許してもらいたい。助けてもらいたい。救つてももらいたい。もう一度と過

ちは犯すことはしないから

「

杉本は後悔を重ね、何度も叫んだ。廃屋が近付くに従い、多くの呻

き声が聞こえて

きた。同じ過ちを犯した者達の悲痛の叫びであった。彼らも杉本と

同様に助けを求

め願い続けている。廃屋の中に入ると、いつも見慣れてはいたが眼
を背けるたくな

る光景であった。しかし、今の杉本の居場所はここしかない。日毎

にこの廃屋に集

まつてくる者達の数も増えている。生きる事に耐えられず、楽にな
れると信じ、自

らの命を絶つて來るのである。が、期待とは全く逆の世界、生きる

以上に苦しい世

界に入り込んでしまった彼らである。今の俺と同じく、永遠に抜け
出す事が叶わな

い、愚かな魂の捨て場所である。

杉本は痛みに打ちひしがれボロボロになつた重たい魂を廃屋の部屋の隅に横たえた。これからもこの状態が続くのか・・・。神が居るなら、仏が居るなら助けてもらいたい。いくら辛くても泣く事すら出来ない。眼を閉じる事も許されない、眠る事も許されない。

一瞬であつた。杉本の眼に光が走り何も見えなくなり深い眠りに陥つたように思えた。瞼を閉じてはいるが何処か明るい処にいるようで、温もりも感じた。自分の右手を誰かが握り締めている。とても優しい感触だった。

「今までの苦痛が無くなつていて。どうしたのか？」

眼を開けようとしたが、眩しくて開ける事が出来なかつた。暫くして周りの明るさに慣れ、恐る恐る眼を開けてみた。するとそこには既に亡くなつたはずの母の顔が見えた。

「母さん」

杉本の声は小さかつた。

「義男、義男。気が付いたんだね

母が息子の右手を強く握り締めながら叫んだ。

「母さん。助けに来てくれたんだ」

杉本は母が自分をあの世から助けに来てくれたのだと思った。杉本の眼からは嬉しさのあまり、涙が止め処なく流れた。

「良かったよ。本当に良かった」

母も涙を流し喜んでいた。

「母さん。ここは何処？天国なの」

「何を言つてのよ。ここは病院よ」

杉本は母の言葉を疑つた。

「病院？俺、死んだんだろ」

「生きているはよ」

母は息子の顔を見て、優しく微笑んでいた。

杉本はまだ信じられなかつた。しかし、時が経つにつれて、自分が置かれている情

況が徐々に分かつてきた。左腕には点滴の針が刺され、鼻の穴には酸素吸入の管、

性器には尿採取の為の管が通されていた。

「俺、死んだんだよな」

杉本は確かめるように母に訊いた。

「義男。あなたは生きているわ」

「俺、死なかつたんだ」

「六ヶ月の間、昏睡状態だつたの」

「昏睡状態？」

「一時は危なかつたわ。どうなるかと思つたけび、気が付いて良かつた。本当に良かった。義男が死んだらどうしようかと思つて。この六ヶ月間、毎日が辛くて、辛くて」

母が再び涙した。

それでは今迄俺が居た世界は夢の中だったのか、そう思つと死ななくて良かつたと
杉本は思つた。

「お父さんも毎日仏壇に向かって、先祖様になんとか義男を助けてやつてくれるよ
うことお願いしていたわ。氏神様にも毎日のように回復祈願のお百度を踏みに行つ
ていたのよ」

「母さん。御免」

杉本は生きている喜びを感じ、それと共に両親に心配を掛けた事への申し訳ない気持で一杯になつた。そして、助かって良かつたと本当に心から思った。

「親父は？」

「直ぐに連絡するから。喜んで飛んでくるよ」

間もなくして父親が病室に到着した。父親は杉本の顔を見るなり嬉しさのあまり顔全体を涙でぬらじ言葉が出てこなかつた。

「父さん。御免よ」

杉本は力の無い小さな声で詫びた。

「母さん。俺、どうしてこの病院に困るんだ。他の連中は？」

「他人の人達も助かつたわよ」

「そうなんだ」

杉本は皆も助かつて良かつたと思つた。

「武田さんて女の方。の方だけが睡眠薬を飲んでいなかつたらしくて眼が覚めた
から怖くなつたので直ぐに救急車を呼んだそうよ

杉本は武田美代子に心の中で感謝した。

「義男。お願いだからこれからも生きててくれよ。親より早くしむな

普段無口な父親からの精一杯の言葉であった。

「父さん、母さん。御免よ。俺、これからは頑張って生きるよ。一度と死ぬなんて考えないよ」

杉本は涙ながらに両親に詫びた。

両親は杉本の言葉を聞いて安心し、そして息子が生きている事の喜びを感じ再び涙した。それからは体力も徐々に回復に向かい、一週間程して杉本は車椅子に載せられ、病院の隣に面した公園に連れて行つてもうつた。

既に八月の初めであった。日差しは強く、眩しかった。公園の木々からは蝉の鳴き声が聞こえた。杉本にとっては久し振りに浴びる陽の光である。体から汗が滲み出てきた。木陰に入ると涼しく気持が良かつた。生きている事を体全で感じ取り、生きていて良かつたと思った。

「六ヶ月か・・・」

杉本には何年にも何十年にも思えた。あれが夢で本当に良かつたと

心の底から思つ

た。あのような世界が有るのか無いのか定かではない。夢の中だけの世界かも知れ

ない。それとも両親の強い思いが神仏に通じ死の淵から助け出されたのかもしれない。

い。たとえ夢だったにしてもあの様な世界は一度と御免である。人はそれぞれであ

る。生きる事も死ぬ事も個人の自由である。しかし、杉本自身、これからは何がある

うとも生きる道を選ぶ事にした。

公園の片隅の花壇に目をやると、向日葵と木槿が綺麗な花を咲かせているのが良く見えた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2454f/>

自死への誘い

2011年6月1日16時16分発行